

氏名(本籍)	飯塚勝久(東京都)
学位の種類	文学博士
学位記番号	博乙第107号
学位授与年月日	昭和57年11月30日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
審査研究科	哲学・思想研究科
学位論文題目	フランス・ジャンセニスムの精神史的研究
主査	筑波大学教授 文学博士 永井博
副査	筑波大学教授 文学博士 中埜肇
副査	筑波大学教授 高木勘弼
副査	筑波大学教授 文学博士 小川圭治
副査	筑波大学教授 富原芳彰

論文の要旨

- (1) ジャンセニスムはオランダのコルネリウス・ヤンセン(1585—1638)に端を発し、17世紀のフランスにおいてサン＝シラン、アントワヌ・アルノー、ブレーズ・パスカル等によって拡充された、意義深い精神運動であった。この精神運動の拠点となったのが、ポール＝ロワイヤル尼僧院である。ジャンセニスムは、特にパスカルを通して、西欧の近代哲学に多大の影響を与えた。本論文は、この思潮の生成過程と本質的特徴を精神史的視点から解明した画期的労作であって、序論、第一部ジャンセニスム(第一章伝統の問題、第二章自然の腐敗、第三章祈りと苦行の弁証法、第四章苦行の神学)、第二部ポール＝ロワイヤル(第一章尼僧院、第二章隠士、第三章小さな学校、第四章デカルト哲学)、第三部パスカル(第一章ジャンセニスム体験、第二章弁証論としての哲学、第三章自然学の方法)の本文三部及び結語から成る。
- (2) 序論では論文の基本動機に触れ、西欧近代精神の本質は、ヒューマニズムにあり、現代精神もまたこれを基本とし、特に科学技術の根底はヒューマニズムの原理にほかならないとするが、その原理が今日、深刻な危機に陥ったとの判断から、これを克服するための一つの有力な手掛りをジャンセニスムの、特にその代表的哲学者パスカルの宗教的合理主義に見出す。
- (3) 第一部では、アウグスチヌス主義の復興・再生を通して「内的人間の改革」をせまることこそ、キリスト教会の伝統を賦活する所以であると主張し、ジェズイットィスムに厳しく対決したジャ

ンセニスムの内面的必然性を明快に説明し、そこに神学的恩寵論を別としても、なおジャンセニスムに固有の精神的・実践哲学的意義を認めなければならないとする。この特質を典型的かつ徹底的に体現したのがサン＝シランであり、彼の「苦行」の哲学を「内面性と外面性の弁証法的統一」としてとらえ、アルノーの実証神学もこれに支えられていることを論証するなど、実践的神学者サン＝シランがジャンセニスムの形成に果たした役割を克明に分析する。

- (4) ジャンセニスム形成の現実的基盤となったのは、ポール＝ロワイヤル尼僧院である。第二部では、『ポール＝ロワイヤル尼僧院規程』等の第一資料に基づいて、厳格な禁欲主義に徹した尼僧たちの信仰生活の実相を、微細にわたって描き出す。尼僧院には少数の「隠士」が出入して尼僧に準じた生活をしたが、その生活規範は、世間からの空間的・精神的離脱にあり、ここでもサン＝シランが最高の指導者であったことを確認し、さらにジャンセニスムの教育組織を取上げ、ジェズイット学院が世俗的かつ大規模な学校であったのと比べて、「内面的人間の改革」を目差すジャンセニスムの「小さな学校」は、ジャンセニスムそのものの最も野心的な具体化であり、その故に時の為政者たちの脅威となって迫害を受け、指導者サン＝シランが逮捕投獄されて非業の最期を遂げる経緯を追跡する。また、ジャンセニスムの神学者アルノーがカルテジャンとされる真意は、通念に反して、「思考」が「祈り」と対立せず、むしろこれを強化する立場に立つ点にあり、『論理学』は、その立場で書かれたと主張する。
- (5) 第三部では、最も独創的なジャンセニストと見られるパスカルの哲学の構造と方法を立入って解明する。パスカルはサン＝シランの影響を受けたが、隠士ではなく、世間からも離脱せず、数学・自然科学において傑出した業績を挙げた。しかし、そうした活動の根底には、二回にわたるジャンセニスム体験、すなわち回心によるジャンセニスム信仰があった。この二回の回心の内容、軽重についてはさまざまな解釈があるが、それらの解釈を周到に検討した結果、第一回心に決定的重要性を与える。彼のジャンセニスム体験は「心情の弁証法」としての独自の哲学を産み、それが一方ではジャンセニスム信仰に強固な基礎を与えるとともに、他方では同時に数学や自然科学にデカルトに優る厳密性を与えることができたが、それは、デカルトの場合、自然科学と形而上学を混同したために両方で過ちを犯したからであるとする。すなわち、パスカルは宗教的次元と科学的次元とを峻別し、双方で「理性」の厳密性を確保することによって、かえって両者の統一を果たし、真の「理性批判」を遂行し得たのであり、またジャンセニスムを代表する真の「哲学者」たり得たと見るのである。
- (6) 結語では、人間の内面的革新によってキリスト教を再生させようとするジャンセニスムは、ジェズイットのスコラ主義を乗り越え、真の意味での近代的合理性を確立し、近代固有のヒューマニズムを定礎したが、この種の認識は、本論文で展開された精神的考察によって初めて可能であるとし、得られた精神的知見を発条とする、現代ヒューマニズムの哲学的構築への手掛りと見通しについて述べる。

審 査 の 要 旨

- (1) フランス・ジャンセニズムに関しては、わが国ではまだ単行本に相当するような包括的研究は見当たらない。論者は、マザラン図書館、フランス国立図書館その他の、フランス本国でのみ利用可能な、17, 8世紀に刊行された第一資料に依拠してそれを活用するとともに、フランスにおける新旧の代表的研究書を渉猟し、各資料の長短を精細に比較検討し、進んで論者自身の創見を呈示する。その洞察は、しばしば従来の定型的解釈を衝きくずし、ジャンセニズムの隠れた本質を剔抉する。本論文が、ジャンセニズムに関する、わが国での画期的業績であることは疑いなく、今後の研究者は、本論文を無視して、ジャンセニズムについて語ることは困難であろう。論者は、ジャンセニズム研究家として、今まで公表した諸論文によってすでに学界の注目するところとなっているが、今また本業績によって、新たに学界に貢献したと言ってよい。
- (2) ジャンセニズムの優れた研究はフランスに多いが、それらの研究は、わずかの例外を除き、ほとんど事実関係の解明に終始し、事実のもつ本来の歴史的意味を総合的に把握するという点に欠ける。本論文が「精神史的研究」を標榜するのは、この欠陥を衝き、あえてそれを克服しようとするからである。一般に精神史的考察と称するものなかには、事実を遊離し、主観的思弁に走り、独断に陥るものが少なくないが、論者は第一資料の的確な読みと精緻な分析を行い、見事な文献学的成果を挙げることによってその難を免れるとともに、ジャンセニズムの精髓を「内的自己の革新」としてとらえ、近代及び現代のヒューマニズムに対する鋭利な問題意識のもとに、単なる実証性の地平に埋没することなく、精神史的方法の有効性を立証したといえる。このことは、西洋近代哲学史の精神史的再構成という、現代哲学の重要課題の打開に貴重な指針を与えるばかりでなく、宗数史、宗教思想史、教会史の分野にも新鮮な示唆を与えるものとして評価される。
- (3) しかし、上記の功績にもかかわらず、本論文には、次のような問題点が指摘される。第一に、論者は、精神史的方法によって多大の成功をおさめたにもかかわらず、時に、事実関係の歴史的詮策に深入りしすぎた結果、哲学論文として読む場合、突込みが甘くいささか物足りない、といった感じを与える。この点については、ジャンセニズムそのものの思想的内容を立入って考察し、類似点の多いカルヴィニズムとの実質的比較論を行ったならば、より実り多い結果が得られたであろう。第二に、序論で提起した問題を結語で総括的に再検討することによって、多義的に用いられていると思われるヒューマニズムの概念を明確にしたうえで、特にジャンセニズムと現代ヒューマニズムとの内面的関連をより徹底して分析したならば、叙述は一層説得的たり得たであろう。しかし、以上の問題点にもかかわらず、本論文がわが国において、ジャンセニズムに関する最初の、卓抜な包括的研究であることにかわりはなく、その学問的水準は極めて高く、学界に貢献するところ多大であると判定する。よって、著者は文学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。